

現代韓国語と日本語の「遭遇系間投詞」に表れる 話し手の事態評価について¹

Emotive aspect of “interjections of encounter” in Modern Korean and Japanese

金善美

KIM Sunmi

1. はじめに

1.1 定義と先行研究

韓国語にも日本語にも間投詞、あるいは感動詞と呼ばれる一群の言葉がある。統語的には他の文の構成成分から独立しており、形態的には活用をしない、意味的には話し手の感情、物事を認識する態度、聞き手に対する働きかけなどの意味合いを持つものである。本論文では上記の定義に合致するものを間投詞と呼ぶ。

現代韓国語では崔鉉培(1961)の品詞分類と例示が先行研究として重要であるほか間投詞を対象とする主な研究に、申智妍(1988, 2001)、오승신(1995)などがある。日本語の間投詞を対象とした主な研究には森田(1973, 2002)、森山(1996, 2000)などがある。本稿と関連する研究に、韓国語と日本語の間投詞と指示詞との関連性を述べた金善美(2004, 2006a, 2006b, 2007)があり、間投詞の中でもとりわけ「ええと」と「あの(一)」を挙げ心的操作標識としての技能を考察した研究に定延・田窪(1995)がある。また田窪(2005)では感動詞を心的情報処理機構と関連させて論じる一方で感動詞の言語学的位置づけについても考察している。定延(2005a)は音声コミュニケーションの中で観察されるフィラーやつかえ、さまざまなイントネーションやりきみ、空気すすりなどについて包括的に考察している。

日本語においても韓国語においても、間投詞は大きくわけて感情的なものと思意的なものに分けるのが一般的な流れである。崔鉉培(1961:1967)は驚き・喜びなど純粋な感情を表わすものを「感情的感動詞」、人を誘う・人を呼ぶなど意思とかがわるものを「意志的感動詞²」と呼んだ。申智妍(1988:26-27)は間投詞の意味を区分する基準として意思伝達の通報を目的とするか否か(±communicative)と感動性の有無(±emotive)という基準を設け、聞き手を想定しない単独的場面で主に現れて感動性を持っているのを「感情的間投詞」と呼

¹ 本論文は科学研究費補助金(課題番号: 21320082)による研究成果の一部である。

² 先行研究の引用部分における「意思」と「意志」は本来の用字を尊重した。

び、相関的場面で聞き手を想定しその聞き手に自分の意思を伝えようとする、つまり通報を目的として発話し、感動性を持たないものを「意志的間投詞」と呼んだ。오승신(1995:52)も「非意思伝達の間投詞」と「意思伝達の間投詞」とに区分している。森山(1996:52)でも感動詞を「対他的でない」と「対他的」なものに分ける。そして、対他的でないものには情動的感動詞(わあ、おおなど)と掛け声(よっこらしょっとなど)を、対他的なものには挨拶・呼びかけ(よっ、ねえなど)と応答詞(はい、へえなど)、いい淀み感動詞(ああ、ええなど)を含めている。森田(2002:19)は感動詞を「言語以前」(擬声・擬音など)と「融合型」(感動・感嘆など)、「対立型」(挨拶・勧誘など)とに分けている。「言語以前」はその声や音を文字化すれば語彙の一種になるものとされ、本稿での間投詞の定義からは外れるものである。「融合型」は多くは独り言としてのもの、「対立型」は対相手意識の発生・発話行為としてのものであるとしている。

1.2 問題提起

前節で見たように間投詞の感情的・意思的の区別は「融合型・対立型」とも呼ばれることがある。後者の用語の背景には、感情的間投詞は「聞き手も話し手と同じ心情視点に立つとの一体感的意識に根ざす言表」、意思的間投詞は「聞き手との間に心理的距離をもち、話し手と対立する関係にあるとの意識に根ざす発話」(ともに森田 1973:182)であるという考え方がある。これによって「感情」、「意思」という概念による記述が、話し手・聞き手という概念および両者の融合・対立という概念によってより客観的に捉えられたといえる。さらに話し手・聞き手、融合・対立といった概念は指示詞研究やモダリティ研究におけるキーワードでもある。そこで、このようなとらえかたが可能ならば間投詞と指示詞やモダリティという領域との類似性、あるいは同一性があることになる。

しかし、感情的間投詞を「融合型」とするには次の二つの問題点がある。

一つ目は、話し手しか所有していない情報を想起した場合に発する間投詞や掛け声などが、森田(1973:182)の説明のように「聞き手も話し手と同じ心情視点に立つとの一体感的意識に根ざす言表」だと理解するには無理があるのである。情報の管理面で話し手しか関らない場合は聞き手が関与する余地はなく、聞き手の存在を考慮すること自体意味がない。この区別は「融合型」の多くは独り言としてのものである」とする森田(2002:19)自らの説明とも矛盾するものである。

二つ目は、「間投詞の融合型」という概念は言語一般に適用可能と考えられるが、韓国語のいわゆる感情的間投詞(融合型)の中には韓国語のユ系(日本語の指示詞のソ系)にほぼ該

当、詳しくは金善美(2004, 2006a, 2006b)などを参照)の指示詞に由来する間投詞が含まれているということである。森田の分析においては起源となる指示詞は対立型にあたると考えられるのに対し、それに由来する間投詞が融合型にあたるのである。

以上のことから「間投詞の融合型」という概念の有効性が問われる。本稿においては、間投詞における話し手と聞き手の役割という側面だけを採用して論を進めることにする。

本稿は韓国語と日本語の間投詞の用法において話し手と聞き手の、話題になっている事態や情報への関わり方について考察する。主たる観察対象は感情表出型間投詞の中でも特に意図していない状況に遭遇した場合や一時的に忘れていた情報を想起した場合に発する間投詞とし、話題となっている情報の帰属場所、話し手と聞き手の言語場における役割について検討する。

2. 遭遇系間投詞

2.1 韓国語と日本語の遭遇系間投詞の定義と分類

本論文の注目するタイプの間投詞、つまり特に意図していない状況に遭遇した場合と一時的に忘れていた情報を想起した場合に発する間投詞を森山(1996)は「遭遇系感動詞」と呼んでいる。本論文でも同様に、この類の間投詞を「遭遇系間投詞」と呼ぶ。このタイプの間投詞については韓国語と日本語の間投詞を対象とする研究に限定して言えば主な研究として韓国語では申(1988)が、日本語では森山(1996)が挙げられる。

申(1988)は話し手の情緒的な反応を表わす表現を「感情的間投詞」と呼んだ上で、話し手にとって未知の事実であることを表わすものを「初めて知ったこと」を表わす間投詞と呼んだ。森山(1996)は「遭遇系感動詞」と呼んでいる。それぞれの分類と解釈を申と森山の研究から紹介すると次の通りである。

(1) 韓国語：申(1988)の分類と解釈

- 1) 아, 아이고, 에그머니, 아니, 이런, 저런, 어머니, 맏소사, 원(세상에) : はじめて知った場合と想起の場合など全般で使える。
- 2) 참(그렇지), 아차, 아뵐사 : 忘れていたことをいきなり思い出す。
- 3) 이크 : 知らなかった事実を悟る (肩をくすめる動作を伴う)
- 4) 아하 : 知らなかった事実を悟る + それ嬉しい
- 5) 야아, 야 : 初めて事実を知る + それ嬉しいと感じる
/ 어럽쇼 : 初めて事実を知る + それ笑わせると感じる

(2) 日本語：森山(1996)の分類と解釈

- 1) あ：直接経験、想起両方とも使える。
- 2) あら、あれ、あれれ、おや、え、ぎゃあ（危険な状況との遭遇）、うわあ：直接経験した場合に使う
- 3) おっと、おっとと：予想外のハプニングの発生
- 4) まあ、わあ、きゃあ：情動の変化が弱いものから強烈なものへと変わる

上記に挙げている間投詞はすべて発話時点で既知情報が活性化されるか新情報を獲得する、または予期しなかった状況に遭遇することによって情報処理に迫られているなどの意味を伝える談話上のマーカーだと言える。

2.2 「遭遇系間投詞」の分類と機能を考察する意義

従来の間投詞の分類の中で登場する挨拶・呼びかけ（よっ、ねえなど）と応答詞（はい、へえなど）などの間投詞と違い、遭遇系間投詞は必ずしも聞き手を必要とするわけではなく無意識に発話される場合が多い。つまり多くの場合、間投詞の機能が意識されぬまま当該言語の母語話者によって運用されている。この点については定延(2005b)も次のように述べている。

「私たちが「感動詞の機能」を論じようとする時、その時点で「感動詞は、人間が何らかの目的を達成するために道具として使われるモノだ」という道具的な感動詞観が滑り込んでいることにはならないだろうか。その見方は外部の観察者にとってではなく、感動詞を日々発して暮らしている日本語の日常生活者にとって、リアルなものだろうか。」

上記の指摘は母語話者の言語使用の実感という立場からは一理ある指摘かもしれない。しかし、韓国語と日本語という両言語を対象に遭遇系間投詞の分類と機能を考察する意義は次のような二点において認められる。

一つ目は、同じ遭遇系間投詞だとしても日本語と違い、韓国語の遭遇系間投詞の場合、「아! , 왓!」などのような無意識に発せられる音声表現も存在する一方で、「애개개, 에그머니나, 어럽쇼」のように限定された状況でしか現れない形式も存在し、これらは辞書の一つの語彙項目として掲載する必要が高いと考えられる。韓国語の遭遇系間投詞とし

て使われる言葉は、いわば日本語に比べて語彙化が進んでいるのである。このことから、本稿のように韓国語と日本語の両言語の対照を行う研究においては、これらの表現を分類し機能を考察する作業により新たな視角を提示できる。

二つ目は、言語教育的な側面での意義である。定延(2005b)は「名詞や動詞などとは違って、感動詞は子供の頃から間違えない、もしくは間違えにくい。これは感動詞が、名詞や動詞などとは大きく違った存在であることを示唆している」とし、感動詞は話し手の気持ちを表す「モノ」の一種（記号）というよりも「行動の一部」もしくは「私たちが身を任せる行動の流れの型」だと説明する。しかし、文化的コードとしての行動様式であるとしても「애개개, 어렵쇼, おとっと」などの間投詞は言語教育の場で扱うべき項目であり、正確な機能的な説明なしに韓国語と日本語のそれぞれの初級学習者がそれらの語彙を正しく運用できるとは思えない。ある程度語彙化が進んだ間投詞は当該言語の母語話者ではない外国人にとっては名詞や動詞と同様の習得過程が必要だと思われる。また韓国語と日本語において音声上類似している表現が必ずしも同じ状況下で使われるわけではないことから機能の考察の必要性が伺える。本稿では、そのように両言語において音声上類似しているが使用上の異なる「흥」と「ふん」、「헉」と「ちえっ」についても考察する。

3. 遭遇系間投詞の用法における韓国語と日本語の違い

3.1 感情表出型と意思伝達型の間投詞

韓国語のいわゆる感情表出型間投詞の中には森田が対立型と分類しているコ（ソ）系の指示詞から由来した間投詞が含まれている。具体的な例を挙げる前に指示詞由来間投詞についての森田の融合型・対立型を説明する。森田(1973:196,204)は間投詞を指示語「こ」系統と「そ」系統に分けそれぞれについて次のように説明する。「こ」系統について「自己の意識外にあったことが突然意識にのぼり驚くことは、驚嘆の対象が突如、話し手側に属することであり、これはコ系の指示語（近称）と発想を同じくする。」とし、「これは」「これはこれは」などを挙げている。「そ」系統について「不可解な事柄、相手の述べた事柄、これらはいずれもまだ話し手側にはない事柄として指示語のソ系統（中称）と発想を同じくする」とし、「聞き手への注意の喚起や叱咤激励」を表わすもので「それぞれ」などを挙げている。要するにコ系統間投詞は融合型に、ソ系統間投詞は対立型に属するという解釈になっている。

しかし、韓国語の間投詞では相手への注意の喚起や働きかけの意図のない、純粋な話し手の驚きなどの感情を表わすだけの表現がある。例(3)をみられたい。

(3) A: 대호가 또 직장을 옮겼다는군.

「テホがまた職場を移したらしいよ。」

B: 그것 참! 한곳에 좀 차분하게 붙어 있을 줄을 모르는 녀석이군!

「まったく!一つの会社にじっくり落ち着くことを知らないやつだな!」

例(3B)での間投詞は話し手 B の感情表出でありながら情報の所在は A であることを伝えている。

ここで情報の所在によって話し手の直接経験なのか間接経験なのかを伝える間投詞の種類をまとめてみる。種類を分ける基準は母語話者によって多少の使い方のゆれが生じるのはありうる。しかし森山(1996:53)も言っているように「どういう状況において典型的に使われ、また使われないか」によって間投詞の用法を観察することにより生産的な規則性を見つけることに主眼をおく。

(4) 直接経験（事態に遭遇、想起）VS 間接経験（伝聞）を分ける基準：情報の場所が自分の領域か相手の領域かによる。

・直接経験：きゃあ、わーい、으아, 앓, 이크 等

・間接経験：あら、まあ、え、(あ)、그것 참 等

このほかに、想起で使われる「あら、まあ」、「え？」なども観察される。この場合は情報の所在は話し手自身である。次の例(5)を見られたい。

(5) (月末に収入と支出を計算してみて) 今月は出費が 50 万だな。え? 何でだろう?

例(5)のような自問自答で使われる「え?」のような場合は情報の所在は話し手自身だと言わざるを得ない³。

3.2 日本語の遭遇系間投詞における「情動の大きさ」と「経験の種類」の問題

森山(1996)は「情意変動そのものの大きさを表すもの」として「まあ、わあ、きゃあ」を挙げて説明する。例えば同じ味見でも「まあ、おいしい。」「わあ、おいしい!」「きゃあ

³ 自問自答における「え?」の用法に対する示唆は千田俊太郎氏にいただいた。記して感謝いたします。

あ、おいしい！」の中では「後ろのほうが強烈な反応を表すという序列がありそうに思われる」としている。この指摘は「まあ、わあ、きゃあ」には当てはまるが、他の間投詞との関連性はどうか。

森山は、情動の幅が相対的に低い「まあ」は相手の発言に対する軽い驚きを覚える場合にも使えるという。次のような例が考えられる。

(6) 子供： 明日は朝早い。朝7時前には学校に着きたいからね。

子供の母： まあ、いつも学校に行きたがらないあなたが珍しいわね。

しかし、「情意変動そのものの大きさ」という基準によって間投詞の用法を規定することは日本語母語話者にとっては極自然にかつ瞬時に行われることだとしても、非母語話者にとっては分かりにくい面がある。次の例を見られたい。

(7) a. (暫く温泉に浸かっている状態で)「ああ、気持ちがいいなあ」

cf. 「??わあ」

b. (暗い道で何かに当たって見てみるとそれはゴリラだった)「わあ」

cf. 「*ああ」

(森山 2000 : 33)

例(7a)と例(7b)における二つの場面は、味の強烈さが強から弱へと並ぶような味見をする場面とは違って、互いにまったく関係のない二つの場面である。これらの例文の中で温泉に浸かる際の情意の大きさとゴリラに出くわした時の情意の大きさ自体は序列が決められる性質のものではない。しかしその情意に対して日本語で語彙化が行われている以上、外国人学習者は温泉につかる際の情意変動は「わあ」ではなく「ああ」で表現すべきであり、ゴリラに出くわした際の情意変動は「ああ」ではなく「わあ」であるということを学ばなければならない。すなわち、ある人がある場面で感じる情意の大きさというのはその人の受け入れ方によってまちまちであるが、それらの情意に対し、ある言語文化圏で語彙化が生じた場合は、それらの語彙には、例えば日本語であるならば、その場面で選ばれる間投詞に「わあ」と「ああ」のような種類の序列が生じると言える。また事態や情報に対する話し手の評価は直接経験時と間接経験時に間投詞の種類にも序列を与える。次の一連の例を見られたい。

- (8) a. うわ！ 火が君の髪に燃え移ってるよ！
 b. #おっととと、火が君の髪に燃え移ってるよ！
- (9) A: 「ここに来る途中見たけど、君の家に火事が起きたよ！」
 B1: 「わあ！ 大変！」
 B2: 「#あら、まあ、大変！」
- (10) A: 「君に地方への転出命令が下った。」
 B1: 「えっ？ どうしてそんな事が・・・。」
 B2: 「??わーい！ どうしてそんな事が・・・。」
- (11) a. (月末に収入と支出を計算してみて) 今月は50万も貯金できるな。わーい！ 来月も頑張ろう！
 b. (月末に収入と支出を計算してみて) 今月は50万も貯金できるな。??あれ？ 来月も頑張ろう！

上記は例(8)から(11)までにおいて、それぞれ適切な間投詞の使い方と不適切な使い方を見せた。具体的には、例(8)と(9)のような緊迫した状況において適切な間投詞は「うわ、わあ」である⁴。例(10)では驚きと戸惑いの「えっ」は適切であるが喜びを表すとされている「わーい」は適切ではない。逆に例(11)では喜びを表す「わーい」は適切であるが、驚きと戸惑いの「あれ」は適切ではない。これらの例のように、話し手が直面した直接・間接的なイベントを目前に発せられる日本語の間投詞には、その種類において情意変動の大きさを表す語彙としての序列が日本語母語話者の間で認められている。日本語の非母語話者が日本語の間投詞を適切に使いこなすためには、これらの語彙の序列も一緒に習得する必要がある。

3.3 韓国語と日本語の遭遇系間投詞の分類と機能

ここでは、韓国語と日本語の遭遇系間投詞を対象に「(4) 直接経験（事態に遭遇、想起）VS 間接経験（伝聞）を分ける基準」によって、「誰にとって、どのような情報によって、どのような事態評価になっているのか」について分類する。例えば韓国語の間投詞「아차」は、「話し手にとって、想起による直接経験によって、気づかなかった事実が惜しい」という事態評価が下されているという風に分類できる間投詞である。

⁴ 本稿における間投詞使用の適切さの基準は日本語母語話者の協力を得た。

以下の<表1>⁵は、(4)の基準によって話し手の事態評価を表す韓国語と日本語の遭遇系間投詞を分類したものである。

<表1>韓国語と日本語の遭遇系間投詞の分類と機能

遭遇系間投詞	経験の種類	話し手による事態評価
그것 참	間接経験（伝聞） 直接経験（想起のみ）	はじめて聞いた場合と想起の場合の驚き、嬉しさ、憤慨。
이크 {제기랄}	直接経験	自分にとって不利な事態である場合
아이고 {에그머니,아니,이런,저런,어머나,맘소사,원(세상에)}	直接経験	はじめて知った場合と想起の場合の驚きや焦り
피 {헛, 흥}	直接経験	事態が面白くないと感じる、軽蔑。相手への敵意の表出。
애개개	直接経験	軽蔑、失望
아차 {아뽀싸}	直接経験（想起のみ）	気づかなかった事実が惜しい。独り言の場合が多い。
어럽쇼	直接経験	軽蔑
참{아하}	直接経験（想起のみ）	忘れていたことに気が付いた。それが嬉しい。
あら {あれ、あれれ、おや、えっ}	直接経験	驚き
おっと {おとっと}	直接経験	少し意外な事態との遭遇
まあ {わあ}	直接経験	感嘆
きゃあ{ぎゃあ、うわあ}	直接経験	危険との遭遇
そん나	間接経験（伝聞）	不満、納得が行かない。
ありゃ {ありやりゃ}	間接経験（伝聞）	同情、意外な展開への驚き。
ちえっ{ふん}	直接・間接経験(伝聞)	あきらめや不満。「ちえっ」は独り言の場合が多い。
しまった	直接経験	自分にとってまずい状況
くそ {ちくしょう}	直接経験	憤慨

⁵ <表1>の事態評価の解釈は申(1988)と森山(1996)の解釈を踏まえている。

表<1>の分類を裏付ける例を以下挙げてみる。

まず、「그것 참」の場合、話し手の経験の種類としては「間接経験（伝聞）、直接経験（想起のみ）」を表し、話し手がある事実をはじめて聞いた場合、もしくは思い出した場合に感じる驚き、嬉しさ、憤慨を表す間投詞である。以下の例(12)と(13)を見られたい。例(12)は伝聞により知った事実に対する話し手の焦りや憤慨を表しているが、例(13)は想起した事実に対する嬉しさを表している。この間投詞は幅広い場面で使われている。

(12) (=3) A : 대호가 또 직장을 옮겼다는군.

「テホがまた職場を移したらしいよ。」

B : 그것 참! 한곳에 좀 차분하게 붙어 있을 줄을 모르는 녀석이군!

「まったく!一つの会社にじっくり落ち着くことを知らないやつだな!」

(13) (甥のプレゼントしたネクタイのことを思い出して嬉しくなり、独り言で)

그것 참! 기특한 녀석이네.

「ははっ! 奇特なやつだな。」

次に「이크 {제기랄}」の場合、話し手の「直接経験」を表し、当該の状況に対する話し手の事態判断として「自分にとって不利な事態である」ことを表す間投詞である。それ故、次の例(14a)は自然な発話であるが、例(14b)は不自然である。

(14) a. 이크 {제기랄}! 큰일났네!

「しまった{くそ}! 大変だ!」

b. #이크! 잘 됐다.

「#しまった! うまくいった。」

次に「아이고 {에그머니, 아니, 이런, 저런, 어머니, 맘소사, 원(세상에)}」の場合、話し手の「直接経験」を表し、話し手の事態判断として「はじめて知った場合と想起の場合の驚きや焦り」を表す。例(15)を見られたい。

(15) 아이고 {에그머니, 아니, 이런, 저런, 어머니, 맘소사, 원(세상에)}! 이 일을 어째!

「どうしよう! この事態をどうしよう!」

次に「피 {plet, hong}」の場合、話し手の「直接経験」を表し、話し手の事態判断として「事態が面白くないと感じる、軽蔑。相手への敵意の表出」を表す。例(16)を見られたい。

(16) (敵意を感じる相手に聞こえるようにわざと声を上げて) 피 {plet, hong} ! 더러워서 못 살겠네 / 또 잘난 척이야!

「くそ{ちえっ}! 本当に見てらんないな / 鼻持ちならないな!」

ここで一つ考えてみるべきことは、韓国語と日本語において音声上類似している表現が必ずしも同じ状況下で使われるわけではない、ということである。<表1>から日本語の例を挙げてみる。

(17) (掃除を一人ですることになり、皆が帰った後、独り言で) ちえっ{ふん}! しようがないな…。

「(韓国語に訳す場合) 치 {jit}! 별 수 없네…」

上の例(16)と(17)から「홍」と「ふん」、「plet」と「ちえっ」は互いに音声上酷似しているにもかかわらず、両言語において使われる場面が異なる。例(16)の「피 {plet, hong}」は話し手にとって事態が面白くないと感じる時の強い不満の表出であり、聞き手が存在する場合はその聞き手に対する軽蔑や敵意を露骨に表す際にも出現する間投詞である。しかし、例(17)の「ちえっ{ふん}」は当該事態に対する話し手自身のあきらめ、不満を表している。特に「ちえっ」はしばしば独り言に出現するものであり、韓国語に訳すなら「plet」よりは語感の弱い「치」「jit」にもっともニュアンスが近い。この「ちえっ」は聞き手がいる場合でもその聞き手に対する露骨な軽蔑・敵意を表すために使われるわけではない、という点が韓国語の「plet」と異なる。

次に「애개개」の場合、話し手の「直接経験」を表し、話し手の「軽蔑、失望」という事態評価を表す。従って例(18a)のような発話は自然であるが、例(18b)は不自然である。これは日本語の「あれ」の使い方とも一致する。

(18) a. (金額を数えてみて) 애개개! 이렇게 적어?

「あれ?こんなに少ないの?」

b. (金額を数えてみて) #애개개, 이렇게 많아?

「#あれ?こんなに多いの?」

次に「아차 {아빨싸}」の場合、話し手の「直接経験（想起のみ）」を表し、「気づかなかった事実が惜しい」という事態判断を表す。独り言の場合が多い。従って例(19a)のような発話は自然であるが、例(19b)は不自然である。

(19) a. (試験の終わった後) 아차{아빨싸}! 답안지에 이름 적는 걸 잊어버렸다!

「しまった! 答案に名前を書くのを忘れちゃった!」

b. (試験の終わった後) #아빨싸! 그건 이미 알고 있었어.

「そうだった! それはすでに知っていた。」

次に「어렵쇼」の場合、話し手の「直接経験」を表し、当該事態へ話し手の「軽蔑」の判断を表す。例(20)を見られたい。

(20) (普段から見下していた人物が社長になりテレビに出たのを見て) 어렵쇼! 저런 작자도 사장을 다 하는군.

「ふん! こんなやつも社長を務めるわけだな。」

次に「참{아하}」の場合、話し手の「直接経験（想起のみ）」を表し、話し手の「忘れていたことに気が付いた、それが嬉しい」という事態判断を表す。例(21)を見られたい。

(21) 참{아하}! 이런 방법이 있었네!

「そうだ! こんな方法があったんだ!」

以上は韓国語の間投詞の例であるが、以下からは日本語の間投詞の例を見ていく。日本語の間投詞「あら {あれ、あれれ、おや、えっ}」は話し手の「直接経験」を表し、話し手の「驚き」を表す。例(22)を見られたい。

(22) あら {あれ、あれれ、おや、えっ} ? こんな所に財布が落ちているなんて?

例(22)に比べて、「おっと {おととと}」は話し手の「直接経験」ではあるが、驚き

の度合いがやや低い「少し意外な事態との遭遇」であることを表す間投詞である。例(23)を見られたい。

(23) おっと {おっとっと}、つまずくところだった。

ところが、話し手の「直接経験」の中でも話し手の感じる情意が「感嘆」なのか、それとも「危険との遭遇」による悲鳴に近いものなのかによって選ばれる間投詞が違ってくる。「感嘆」には「まあ {わあ}」が、「危険との遭遇」には「きゃあ {ぎゃあ、うわあ}」が母語話者によって選ばれる。例(24)(25)を見られたい。

(24) (お花を見て) まあ {わあ}、きれい!

(25) (毒蛇に遭遇して) きゃあ {ぎゃあ、うわあ}! 助けて!

一方、話し手の「間接経験(伝聞)」の中でも話し手の事態判断が「不満、納得が行かない」場合は「そんな」が選ばれ、価値判断が「同情、意外な展開への驚き」の場合は「ありゃ {ありゃりゃ}」が選ばれる。例(26)(27)を見られたい。

(26) (自分だけが左遷されたことを知り) そんな、ばかな…。

(27) (友達が左遷されそうだという噂を聞かされて) ありゃ {ありゃりゃ}、しまったね…。

最後に、話し手の「間接経験」の中でも話し手の事態判断が「自分にとってまずい状況であるが、他人へ向けた敵意ではない、やや消極的な姿勢」なのか、それとも当該事態に対し「憤慨」しているかの違いによって前者には「しまった」が、後者には「くそ {ちくしょう}」が選ばれる。例(28)(29)を見られたい。

(28) (レジで) しまった! 財布忘れてきた!

(29) (敵の罠に嵌ったと思い) くそ {ちくしょう}! いつか仕返してやる!

以上の考察から次の事実が見えてくる。韓国語と日本語の遭遇系間投詞の機能的・形態的な側面における違いである。まず、機能的には、韓国語の遭遇系間投詞は目前の事態・情報に対し、話し手の特定の態度を示すものが多い。その際、語彙別に特定の状況以外で

は使えないという特徴を持つ。日本語よりも多種多様な話し手の評価が加わっている。それに比べ日本語の遭遇系間投詞は、特定の話し手の評価を伴うものはあるが、韓国語のように特定の状況を限定するわけではなく一つの間投詞が数種類の場面で使われる。次に形態的には、韓国語の遭遇系間投詞は他の品詞から派生されたものではない間投詞が多い。それに比べ日本語の遭遇系間投詞は他の品詞からの派生によるものが比較的多い。

3.4 韓国語の間投詞は典型的なジェスチャを伴う。

定延(2005a)は日本語の音声コミュニケーションの中で観察されるフィラーやつかえ、さまざまなイントネーションやりきみ、空気すすりなどについて包括的に考察している。これに対し韓国語の遭遇系間投詞の中にも典型的なジェスチャを伴うものがある、という事実は合い通じる面があると思われる。まず「이크」の場合は肩をすくめる動作、「피」は口周辺の筋肉をゆがめる動作、「아하」は片手で膝をたたく動作を伴う。これらの間投詞は音声表現が発話されるのと同時に上記の特定の身体動作が伴われるという点が興味深い。

4. 結論

本稿の考察の結果、次の二点が明らかになった。

一つ目は、韓国語と日本語における遭遇系間投詞の定義と機能を明らかにした。また遭遇系間投詞の使用は聞き手への情報の伝達を目的とせず、話し手の直接・間接経験に対する話し手の事態評価を表すものであることを明確にした。この事実から今後の課題としてモダリティという領域との類似性、あるいは同一性という側面からの考察が必要である。

二つ目は、韓国語と日本語の遭遇系間投詞の機能的・形態的な側面における違いを明らかにした。まず機能的に、韓国語の遭遇系間投詞は目前の事態・情報に対し、話し手の特定の態度を示すものが多い。その際、語彙別に特定の状況以外では使えないという特徴を持つ。それに比べ日本語の遭遇系間投詞にも特定の話し手の評価を伴うものはあるが、韓国語のように特定の状況を限定するわけではなく、一つの間投詞が数種類の場面で使われる。次に形態的に、韓国語の遭遇系間投詞は他の品詞から派生されたものではない間投詞が多い。それに比べ日本語の遭遇系間投詞は他の品詞からの派生によるものが比較的多い。さらに、韓国語と日本語においては「흥」と「ふん」、「唳」と「ちえっ」のように音的に類似している表現が必ずしも同じ状況下で使われるわけではないということがわかった。

注

本稿は、2007年3月31日に韓国嶺南大学で開催された韓国日本語学会第15回学術発表会において発表した内容に修正・加筆したものである。会場で貴重なコメントを下された方々、本稿の日本語例について母語話者としての判断及び有意義な示唆を与えてくださった千田俊太郎氏、玉井尚彦氏、小田涼氏に記して感謝いたします。

参考文献

- 崔鉉培(1961)『우리말본』. 정음문화사.
- 金善美(2004)『韓国語と日本語の指示詞の直示用法と非直示用法』. 博士論文. 京都大学大学院.
- 金善美(2006a)「コ・ソ・アと i・ku・ce の感情的直示用法と間投詞的用法について」『言語文化』第8巻第4号 pp.761-790. 同志社大学言語文化学会.
- 金善美(2006b)『韓国語と日本語の指示詞の直示用法と非直示用法』. 風間書房.
- 金善美(2007)「「遭遇系間投詞」に表れる話し手の事態評価について—現代韓国語と日本語を中心に—」『韓国日本語学会第15回学術発表会論文集』 pp.51-55. 韓国日本語学会.
- 益岡隆志(1991)『モダリティの文法』. くろしお出版.
- 森田良行(1973)「感動詞の変遷」鈴木一彦・林巨樹(編)『品詞別日本文法講座6 接続詞・感動詞』178-208. 明治書院.
- 森田良行(2002)『日本語文法の発想』. ひつじ書房.
- 森山卓郎(1996)「情動的感動詞考」『語文』65: 51-62. 大阪大学国語国文学会.
- 森山卓郎(2000)『ここからはじまる日本語文法』. ひつじ書房.
- 오승진(1995)『국어의 간투사 연구』. 博士学位論文. 梨花女子大學校.
- 定延利之・田窪行則(1995)「言語における心的操作モニター機構」『言語研究』108: 74-93. 日本言語学会.
- 定延利之(2005a)『ささやく恋人、りきむレポーター—口の中の文化』岩波書店.
- 定延利之(2005b)「「表す」感動詞から「する」感動詞へ」『言語』34-11:33-39. 大修館書店.
- 申智妍(1988)『國語間投詞(Interjection)의 位相研究』. 修士學位論文. 서울大學校.
- 申智妍(2001)「감탄사의 의미구조」『한국어의미학』8:241-259. 韓国語意味学会.
- 田窪行則(2005)「感動詞の言語学的位置づけ」『言語』34-11:14-21. 大修館書店.
- 田窪行則(2010)『日本語の構造—推論と知識管理—』. くろしお出版.

東郷雄二(2000)「談話モデルと日本語の指示詞コ・ソ・ア」『京都大学総合人間学部紀要』

7: 27-46. 京都大学.

油谷幸利(2006)「接続形式による日朝対照研究」『朝鮮学報』198: 1-31. 朝鮮学会.

(きむそんみ、天理大学国際学部)